

【セラピストが窮地に立たされる時】 (2001)

マーガレット・ラスティン(Margaret Rustin)

〔※原題: The Therapist with Her Back against the Wall

出典; Journal of Child Psychotherapy, 2001, Vol. 27-3〕

イントロダクション

この論文は、子どものころに受けたトラウマ(心的外傷)の痕跡がセラピーの現場および子どもとセラピストとの関係性に於いて猛威を振るった際のようなことが実際起こるのか、それについて考察したものであります。ここでこれから語ります二人の子ども患者たちは、それぞれにセラピストとしてのわたしへの実に熾烈な挑戦であったといえます。或る意味では、そうした挑戦とはどちらの子にしろ同じだったのですが。つまりわたしの抱える問題というのは、‘彼らにどのようにしたら気持ちを通じるのか(how to get through to them)’ (Alvarez, 1983)であり、それでわたしの彼らの困難についてどうにか獲得した理解がどのようにしたら彼らに活用し得るものになってゆくのかなのでしたから。しかしながら、これからお話いたします2つの事例に於いて私が経験したのはそれぞれ極めて相異なるものであります。まず最初の事例ですが、わたしの患者にとって心理的苦痛から身を守るには唯一の方法しかなく、すなわち自らが苦痛を与える側に回る人物となることであったのです。簡潔に申しますと、それは「攻撃者との同一化」という概念を例証する、一つの明快な事例とも言えるわけであります。彼は、人生から学んだことが2つあると感じておりました。一つは、もしも攻撃の手を止めてしまえば、自らが攻撃の標的にされ、その犠牲となるということ。だから唯もうガムシャラに攻撃を続けねばならないということ。それから2つ目は、もしもそれで傷ついたとしても、誰も自分がどう感じているのかこちらの気持ちなど構ってくれないということ。さらには、それらの傷つきは時として耐え難いものであり、そしてそれは人間性(humanity)とか、一人の‘個’である(being a person)といった感覚をも根こそぎにするようなものであったわけです。こうした信念を密かに抱え持ちながら、それら2つは組み合わせさせて、それで自らが傷を負うといった脅かしを感じたり、生存が脅かされる恐怖で身を慄くといったことがないように、いかなる残忍さも、またありつたけの知略をも駆使して、断固彼は防御の体制を崩すことはなかったのであります。従って、彼とともに共同して作業してゆく上での問題とは、彼の暴力的挑発、情動的かつ身体的なそれらを、どのように凌いでゆけるかといったことであり、また暴力とは対極の、何らかの‘関係性’を築きあげる可能性を探るべくもう一つの別の世界へ向けて彼をどのように導いてゆくかでありました。

さて、2つ目の事例ですが、わたしのその患者は、幼少時に味わったであろう、何ともお粗末な人生としか言いようのないものにも憤りというものまるで全然意識されることはなかったのです。彼は実にひどい剥奪状態に置かれた、生命のない(lifeless)男の子でした。自分には何ら価値がないといった信念で凝り固まっており、だから誰かが耳を傾けて聴いてくれるとか、誰かが自分のことを忘れずに覚えていてくれるとか、誰かがこころを砕いて親身になって心配してくれるなど、まるで想像すら出来なかった

わけであります。彼はこころを喪失した子どもであり、そのように自らを見做しておりましたし、事実彼の通っていた軽度の学習障害児のための学校では、そうした彼の内側で固く信ずるところのものが外的にもそのとおりだと立証されていたような嫌いがありました。つまり彼は思考面ならびに感情面において、どのような能力も皆無と見做されていたということになります。彼は自分が‘虚ろな穴’^{うつつ}みたいなものであると感じていました。それは、母親が彼の8歳の折に、彼を遺棄したとき、つまり彼女のこころから彼を外へと放り出して空っぽになったみたいに、彼もまさにそのとおりに空っぽになったのだと、そんなふうに見えなくも無意識に彼は感じていたようなのでした。彼とのセラピーにおいての技法上の問題は、いつそしていかにしたら治療的関係性の中で‘生気の火花’を見つけてゆくかといったことでした。それは彼にしてみれば、もう一つの徒労に終わるしかないような、無駄な取り組みであり、つまるところ親切ではあっても自分とはどこか隔たりのある、ちょっと上等ぶったプロフェッショナルたちが勝手にやってくれることなのであり、どっちにしても彼にはどうでもいいことなのでした。

これら男の子のどちらも、もし2つの点が達成されるとしたら、セラピーが何かしら助けとなるかも知れないと信じられるに至ったのですが、まず最初のスタート時点で、わたしは彼らのひどく歪められた発達基底にあるところの耐え難い心的苦痛 (psychic pain) というものを充分把握しなくてはなりません。彼らのいずれも、自らについて直接的にわたしに語るなどということはまるで出来ませんでしたから (事実彼らはセラピストなどという存在をどう扱っていいものやら、まったくのところどんな考えも念頭にあったとは言えないわけです)、つまりその意味するところは、わたしが自らの逆転移、すなわちセッションの中でわたし自身が自ら味わう情緒 (emotion) やら、セッションとセッションの間に彼らについて沈思熟考を重ねながら、辛うじてそうした彼らの耐え難いフィーリングについて経験してゆくことしかなかったということなのです。それら耐え難いフィーリングは、彼らの生きる術としてがっちり寄せ付けないようにしておりましたし、またわたしに直接的になじんでゆくといった関係性を育ててゆくことにしても、紛れもなくそれはまさにそうであったわけですから…。わたしの次なる課題は、‘変化’ というものを (失敗を覚悟して) 敢えて賭けるとしたら、それはどういう脈絡で可能なのかを見積もってゆくことでした。まずはわたしがどのように彼らとのセッションを凌いで生き残れたのかということ、またどのようにこうした問題に取り組んだのかがこの論文の実質的中身なのであります。

もしもセラピーに何らかの進展が見込まれるとしたら、3つの要因が必須条件にならうかと思われま。まずその一つ目は、わたしのサバイバルは、いざという時に良きサポートを得、それを拠りどころにできるといったことでなければならぬでしょう。外的なそれとは、すなわち良き同僚、安心できるクリニック内のセッティング、役に立つ参考文献などであり、内的なそれとは、わたし自身の以前の経験で培われたセラピストとしてのセンス (感受性)、わたしの臨床実践の底支えとなっている理論的アイディアとの結び付き、そしてわたしに備わった固有の価値観といったことでもあります。その二つ目は、わたしにはこうしたセラピーには時間が掛かるということを経験してもらった自由が必要でした。わたしは、10年もしくはそれ以上も掛けて生成されたこころのありようを巻き戻そうと尽力していたわけですから、その狙いはその根本に於ける‘変化’ なのです。それが、セラピーを提供する目的なのであり、そうであってこそセラ

ピーは正当化されるといいでしょう。何事であれ、性急に事が片付くはずありませんし、またそれが求められることがあってはならないのです。そして最後には、わたしは、リスクを背負うことを覚悟し、予めその結末を知ることは叶わないとしたら、わたしの‘臨床上の想像力 (clinical imagination)’を拠り所にする必要がありました。もしもわたしがわたしの患者に、たとえ現状に抗ってであろうと、実際に何かしら新しいことの試みを期待してゆこうとしたら、おそらくわたしにもそうできるということを彼らに示すことが求められましょう。わたしはわたしが試みたどんなことも理想化してもらいたくはありません。ここでそれを強調しておきましょう。そして、それらが望ましい技法だとか、或いは他の誰かにもそれが(成功をもたらす)秘訣だということを示唆するつもりもありません。しかしながら、セッションの中でこれ迄に試みてきたどんな既存の方法も役に立ちそうにないといった状況では、セラピストに自然に喚起された反応 response こそ、‘阻害要因 blockage’並びにそこから発生した絶望感を見極める上で直截的に有意味と見做されるわけであります。もしわれわれがすべてこうしたことから目を逸らさず、回避はすまいと決意するなら、何かしら有益なことが出来るやも知れません。われわれの仕事には、勇気と、そして変わってゆける、成長し続けてゆけるといった人間の能力に対するの希望が必要不可欠なのです。さらに、われわれの患者たちにこうした‘こころのクオリティー’がごく僅かでも備わっていると期待しようとしているわけですから(こうした子どもたちにとってセラピーを始めるのには大変なガッツ guts が要るわけですし)、われわれにしてもまた、自らに要請される事柄に於いて粉骨砕身するのはむしろ道理かと思われるのです。

さて、これらの男の子たちがいわゆる‘要保護児童 the looked-after children’のカテゴリーにあるということを聞かれてもおそらく驚かれはしないでしょう。彼らが経験してきたトラウマ(心的外傷)の類いは、事実決して珍しいものではなく、案外よく耳にするものなのであります。

シニシズム、暴力そして絶望

ここでティム(Tim)という子どもについてお話しましょう。私が初めて彼に会ったとき、彼は8歳でした。彼の母親は売春をして稼いでおりました。その稼ぎで彼女はどうか自らと何人か他にも幼い子どもたちを養っていたのです。ティムは第一子であり、彼女のお気に入りでもありました。しかし赤ちゃんが次から次に生まれ、しかもティムが生後18ヶ月目に誕生したのは双子でありました。二人の暴力を振るう男たちとのひどく面倒な関わり合いに巻き込まれており(少なくともそれらの一人はポン引きであったわけですが)、それで事態は彼女にとってはまったくのところお手上げ状態になります。にっちもさっちも行かない状況で神経的に行き詰まっていたわけです。ティムが2歳になるまでに何度となく地域の自治体の資金で運営される社会福祉事務所に受理されるということがあったわけですが、家庭内での暴力沙汰に巻き込まれ、双子のうちの一人在死んだことで、もはや彼女は深刻な神経衰弱に罹ってしまったわけです。養育不能ということで、子どもたちは母親から引き離されてしまいます。フォスター・ケアに於けるティムは、この時点で3歳だったわけですが、タフな男の子で、敢えていうなれば‘サバイバー-survivor’であり、普通のこの年齢の子どもに見られる恐怖心といったものはまるで欠如しており、その点が顕著であると観察されております。例えば彼は、ローラースケートを、舗道でまったく誰の付き

添いもなしにまったく一人で、危険な速度でぐんぐん乗り回すなど平気なものでした。彼は一見して魅力的な子どもでありました。実母にはとても愛着しておりましたから、彼女がフォスター・ホームを尋ねて来たりすると幾らか気分の動揺を示すことがありました。彼は慰めやらいたわりを求めるといったことにはてんで無頓着で、むしろ必要ないといったふうで、驚くほど自立心の強い子どもであったのです。彼は5歳のときに養子縁組がなされました。そして彼の養父母たちはやがて少しずつ悟るに至ったわけですが、それで心痛を抱えることにもなったわけですが、この子どもの自立心の‘甲羅’は彼らとの距離を縮めることはなく、その冷淡なよそよそしさはどうしようもないものだったのです。彼が病気になったときですら、ティムは自分で自分の世話をしようとするのでした。終始誰に対してもいかに遮蔽したふうな彼の態度は、養母にとってはとても耐えられないものでした。しかし、学校で問題が勃発して初めてようやく彼らは助けを求めたのであります。そうした問題行動とは、虚言、盗むこと、そして性的な挑発であり、しかも実際幼い女の子らに対して遊び場やトイレの中でそうした悪戯を行使したわけなのです。

アセスメントが実施され、その後、彼はサイコセラピーを開始しました。彼を担当したサイコセラピストは私の同僚でありましたが、とても残念なことに数ヶ月後にかなり長期に亘っての病気休暇に入ってしまったわけでした。当時ティムの暴力に訴える習癖は、セラピーの中でも頭を擡げてきておりました。体調も芳しくない状態にあって、彼女はとても自分では扱いかねると判断したわけでした。彼自身は自分がそこまで彼女を追い詰めていることを充分自覚していたといえます。こうした状況にあって、彼女が戻ってくるまでには時間がかかりそうでもありましたし、その間にも彼が家庭でそして学校でどのような‘行為化’を起こすものか大層危惧されたわけでもあります。そこでわれわれは別のセラピストを一時的に探すことにしたわけなのです。最初、わたしとしては、言うなれば‘フォスター・セラピスト’といった役割を担った者として自らを考えていたわけでした。つまり彼とのセラピーを1学期かそこらすれば切り上げられるつもりで、そこでその考えに沿ってわたしの技法をも考慮していったわけでした。最初の数週間というもの、それは妥当というか、まずまずそれで行けるような感じだったのです。しかし、時が経つにつれて、ティムとわたしとは互いに抜き差しがたい状態に陥り、そうなるとても簡単にはセラピーを切り上げることも出来ないまま、とにかく継続を余儀なくされていったというわけでした。

ここから2年経過する中で、次から次へとさまざまな事態が勃発し、困難が露呈されていったわけでした。まず最初は、彼の暴力的挑発でした。わたしはティムが本気になってわたしに攻撃を仕掛け、暴力を振るうことを恐れました。これらは、わたし目掛けてモノを(家具類なども)投げつけるといったことが含まれます。唾を吐きかけるやら、部屋中を水浸しにすることもありました。わたしが彼とのセッションをひどく神経質に身構えるようになったのには無理からぬ理由がありました。部分的には実際にわたしを痛めつけるなどもあったわけですが、主として彼の暴力にはその内容においてサディズムが色濃くあるのを認めざるを得なかったからであります。その残忍さは、わたしに対しての侮蔑につながります。わたしが傷ついたりもしくは動揺したりしているなど少しでも感ずるなら、それは卑しむべき弱点として結び付くといったわけでした。彼は、わたしが精も根も尽き果て、もうぐじゃぐじゃになって、傷つき、怒りそして屈辱の余り泣き崩れる姿を見たいとでも思っているかのように、わたしには感じられたのです。彼の治療

期間、ひどい時期には、わたしは彼のセッションがある日には、朝目覚めては恐怖で心底気分が悪くなるのが事実あったわけです。

こうしたことは別に、さらなる問題とは、彼の行動がしばしば‘性的’であったことなのです。もしわたしがそれを抑制し、制限を与えようとして、そのような解釈を与えるなり、もしくはもっと直接的に禁止命令としてそれを伝えようとしますと、こうした事態をせせら笑って、わたしが興奮させられたやら、それで彼により接近したいと思っているやら、そうした明確な証拠として彼は解釈するわけなのでした。彼はかなり高めの戸棚の天辺に横になって寝そべり、そこであれやこれやポルノっぽいスタイルで、性的な身振り手振りを実演してやってみせるわけでありました。わたしは彼から目を離すわけにはゆかなかつたのです。彼がそこから転げ落ちることも想定されましたから。そういうわけで、結局のところわたしはそこで起きていることの‘目撃者’であることを否認もなしに強いられたというわけなのです。

もしもわたしがセッションの中断やら終了といった制裁に出たり、もしくはどうにかセッションをまっとうに遂行するために誰か(母親もしくは父親)にドアの外に念のために待機してもらおうといったことをほのめかすとしたら、彼はひどいパニックを起こし、決して彼の両親には言わないでと嘆願するのです。事実、面接室に於ける悪鬼のような彼と、待合室に於ける‘いい子ぶりっこ’の彼とはまるで別人のようなのでした(受付嬢にはとても気に入られておりましたわけで・・)。わたしは、彼にはこうした尋常ならざるスプリット(分離)された、彼自身の側面を目下のところ、わたしが何とかそれに対処し得るかぎりにおいて、別々にしておくことの必要性を感じておりました。おそらく警察やら福祉事務所が介入することを彼は大いに危惧していたようにわたしには思われます。もしそうなれば、現実にも実母とは二度と会えなくなるという事態につながりかねないといったわけでありました。ティムには、‘情け深い超自我的人物’といった考えなど微塵もなく、その超自我は飽くまでも懲罰的で苛烈極まりないわけです。或る日のセッションでのこと、彼は、一人の囚人が鎖に繋がれて監獄船に乗せられ、7年の刑期をオーストラリアの流刑地で暮らすためになじみの総てに別れを告げて、今まさに祖国イギリスから追放されてゆくといった内容の歌を歌っておりました。その迫真の演技に、わたしとしてはつい憐れみを覚え、思わず涙をこぼすところであったのです。それは唯一度だけでしたが。これは実際のところ、洞察力のある彼の担任の先生の計らいで、「学校劇」でこのまさにドンピシャリの配役が彼に与えられたというわけなのでした。

実は、わたしのテクニク上の困難と申しますのは、わたしが普通の子どものセラピー・ルームを使わずに、わたしの個人用に与えられた部屋で彼と会っていたという事実によります。わたしの部屋は壁に絵が掛けてあり、棚には観賞植物の鉢植えが置いてあり、鍵の掛からない戸棚があったわけです。それで、もしわたしが彼を普段のもっと単純なセラピー・ルームへ移動させるとしたら、彼はそれを‘失敗’と感じたでしょう。たぶん‘措置上の失敗’といった意味で・・。部屋がいかにも施設ふうではないということで、セラピーの早期に於いて、彼はそこに幾らか希望的に反応したということがあったわけで、それはわたしが尚も生きている(aliveness)エビデンス(証拠)としてあり続けたとも言えるのでした。

もう一つ、彼が部屋から外へ飛び出すのは、わたしにとって難しい事態でした。その意図は、わたしに屈辱を味わわせる、焦らして苦しめるといったことなものでした。危険ということではなかったにしろ・・・。彼は廊下の突き当たりの運搬車のためのエレベーターへと駆けてゆき、その中にあった黒板に書かれている牛乳瓶の注文数を確認したり、それから扉をわたしが入れないように閉めるやら、もしくは近くのスイングドアの陰にこっそり身を潜ませるといったことをしました。もしわたしの態度が‘厳格’であるとしますと、彼は本気になって恐慌状態になるのでした。そうした最悪の事態としてここで思い出されるのは、彼の身の安全を確保しようとして、廊下の突き当たりであった窓をわたしが閉めようと躍起になったおかげで、それでいくらか押し問答の末に互いが揉み合いとなり、わたしのほうはイヤリングを引っ張られて落とすやら、彼のほうは窓枠に指を挟んで傷めるなりがあったことでした。或意味ティムは、わたしがルールを厳守しようとするれば、それが彼の中で閉所恐怖症的な思いを募らせ、それで事態をいっそう剣呑なものにすると感じていたようなのです。だが、それはそれとして、しばしば彼の狙いというのは、わたしの愚かぶりを人前に晒す^{さら}といったことのように思われました。わたしがこうした事態に自分一人では対処しきれないと思うとき、セッションからどうにか新たな態勢を立て直す上でわたしには同僚の助けが必要だと思ったのは、こうしたことを経験して初めて実感できた重要な事柄であったわけです。わたしは時折、‘治療的コミュニティー(a therapeutic community)’といったものがティムを抱えるうえで必要ではないかということをおもいましたし、外来治療というのは、その性質上、そうした必要不可欠なコンテントメントが提供されていないということを切実に思い知らされたわけなのです。

わたしは、彼が時として殺意に取り憑かれるさまを認め始め、その剥き出しの攻撃欲にこころが凍りつくことができました。彼には心理的に殺人すらも敢えて不可能ではないという事実に直面することは実に恐ろしいことでした。こうした畏怖の念もありましたけれど、同時にわたしの任務上、どうしてもセラピーの遂行は貫徹しないわけにはゆかなかったのです。一つのエピソードがここで想起されます。ホリデイの期間中、彼が鉄道の線路に飛び降りるといった、自殺めいた出来事が事実ありました。そしてその後、彼がわたしに語って聞かせた物語というのが、一人の男の子が線路に落ちて、そして落ちながら、お母さんと叫んで、そして死んだと・・・。そうしたリスクの程度をはっきりと彼は提示していたわけであり、それらのコミュニケーションの含む意味を彼に語り得るところの言語を見つけようとするのは、とてつもなく骨の折れることでありました。なぜなら彼は、転移解釈上わたしを‘母親’として言及することを決してわたしに許さなかったのです。<‘あのひと’がぼくの母親だよ。(あんたが母親なんかじゃないよ)・・・>と。つまり養母のことを指してですが、彼はこう言い張ります。

ほったらかし、孤独感そして倒錯

彼のトラウマ(外傷体験)となった人生の或る要因の幾つかは、極めて直接的なかたちでセッションの中へともたらされました。それらについて描写を試みようと思えます。一つの重要なテーマは‘幽閉(監禁 imprisonment)’であります。部屋の中で家具を使うやらして、彼はバリエードを築きます。それはいろいろ多目的に活用されましたが、そうした‘防御柵’に立て籠もることで安全だと感じているようでした。その一方で、わたしのほうは、まるで無防備で、結局のところしばしば予知できない、彼の気ま

ぐれな攻撃に翻弄される、言うなれば彼の‘獲物’でしかなかったのです。と言いますのは、彼は武器として使っていた玩具でさまざまな角度からわたしを狙い撃ちすることが的確に出来たわけですから。彼は自分の立て籠もる‘要塞’を、わたしが逃亡できないよう逃げ道を塞ぐ恰好で、扉を遮る位置に敢えてこしらえておりました。ここでふとわたしの脳裏に‘監禁された子ども’というものが彷彿とさせられたのです。これはまた、以前お話しましたように、わたしが彼の性的な虐待的行為が喚起されるさまをじっと見ているように強要されるといったことにも関連づけられるかと思われます。つまりのところ、再び‘逃げ道なし’ということ。ここでわたしは、ごく幼い子どもが、目の前で愛する母親が自らそして別の誰かによって性的に虐げられ辱められているさまを見たり聞いたりすることを強要されているといった‘拷問’に鋭く気づかされずにはいなかったわけです。時折、わたしは、彼に記憶された恐怖の極めて正確に喚起されたそのものをまさに目撃しているのではなからうかと思ったのです。或日、ごく微かな弱々しげな呻き声が漏れ聞え、彼はその‘要塞’からからだを乗り出してきました。恰も餓死寸前といった具合でした。そして床から想像上の食いを手に掴み取るやら、ゴミ箱を漁り始めたのです。〈クロワッサン・・・〉というのが唯一わたしの耳に届いたことばでありました。ソーホーの歓楽街で過ごした彼の幼少期の鮮明な絵図がわたしの脳裏をかすめました。性風俗店の裏手のゴミ箱に廃棄された豪華な食べ物の残飯、それらをたぶんほったらかしのまま放置されていた幼い男の子が漁って食べていたといったふうに・・・。そうした無惨かつ熾烈な痛ましさの瞬間には、いつもの彼の苦々しげな棘とげを含んだ嘲あざけりとは格段に異なった趣きがあったわけです。つまりいつもなら、わたしをわざと誤まった方へと引きずり込んで、苦痛に満ちた落胆を味わわせるといったことが出来たわけですし、それもわたしの希望が、そして関心がどうにか持ち直されるやいなや、わざとそれを踏みにじる恰好で・・・。そんなふうには彼は、わたしをせせら笑い、倒錯した快感に酔いしれ、上機嫌になることだって出来たわけであります。

たぶんこれらすべてに最も濃密といえるのは、‘孤独の感覚 the sense of loneliness’であろうかと思われます。事実これは、彼の外的世界においてほとんど変わることのないものであったと言えます。彼は多くのものを与えてくれる養父母に引き取られていたにも関わらず・・・。彼はその偏執症(パラノイア)的防衛体勢にがっちり嵌ったまま、そこから一步も外へ脱け出すことが出来ずにいたわけです。或日のこと、彼の孤独感のクオリティーなるものが明瞭に外在化されるようなことが起こりました。彼は、部屋の中の全ての家具を勝手に少しずつあっちこっちと引き回しておりましたが、その結果、わたしの座るところがなくなったわけです。事実それと並行して、絶えず挑発的な振る舞いがあり、それでわたしとしては部屋の中で繰り返される乱暴狼藉やら、もしくは彼自身の身の安全といったことにも留意しなくてはなりません。つまり、壁に穴をこじ開けはしないかとか、もしくは窓の敷居に上って、そこから外へと彼が身を投げたりしないかどうかといったことです。それは暖かい日でありました。室内でわたしは暑くて、汗をかいておりましたし、まるで晒さらしものにもでもされているような、いかにも自分を馬鹿げたふうにしたものです。部屋の中をぐるっと見回して、どこか座るところがないかどうか、もしかしたら背をもたれるところがありはしないかどうかと・・・。ティムはわたしを冷笑的に嘲笑あざわらうことを始めます。彼は、わたしが段ボール箱の中で暮らす、堤防にいる浮浪者だということを言います。わたしは、もはやクサイ臭においのするホームレスの老人というわけです。ここでわたしは、いかにも確かに自分が何の価値もない一人

の人間だという恐ろしい感覚に強烈に襲われておりました。ほとんど圧倒され掛けていたといえます。確かに、誰もわたしなどに何の関心も払ってくれないというわけでして、この瞬間わたしは、まさに立ち退きをくらって家財道具一式諸共に路上に放り投げられたといった具合でありました。

ところが掻き乱されると言えば確かにそうでしたが、しかしもっと倒錯的とも言うべきは、ティムが戸棚の天辺に横になり、壁を背にしながら試みる明白なる性交シーンの演出でありました。延々とあの手この手とそうした類いのシナリオが繰り返されたであります。彼は淫らな声を発し、卑猥なことばを使って、せいっぱい性交に携わる双方の役割を演じるわけでした。これ迄も述べましたように、わたしは彼の身体的な安全性をしっかりと見張っていなくてはならないようになっていたわけですが。しかしここで強調したいのは、わたしに投影されるこの状況から逃げる手立てがまるでないといった‘受難の感覚’であります。実母の売春婦としての暮らしに日々身を晒していた彼の外傷的クオリティーの惨さがまったくのところ極めて鮮烈にわたしに取り憑いたかのようでした。そしてわたしとしては、そうした悲惨な状況で味わった苦悶、そして汚辱はまったくのところ彼の未熟な自我を圧倒し、剥き出しのままここに刻印され、その結果として、今やここで何もかも赤裸々にそのままそっくりわたしに彼は肩代わりさせるべく投げ入れられたとしか思えないわけなのでした。

テクニック上のジレンマ

ここに刻まれた、そうした出来事が彼の心的外傷の‘反復’というサイクルに嵌ったままにあるといった恐怖に襲われ、わたしとしては、その情動の露骨な生々しさ、そのひりひりするような傷みが幾らかでも宥められ、そしてわれわれの間にも幾らかなりとも極端なコミュニケーションのかたちを取らずに済むような工夫を何としても見出さなくてはならないと、懸命にならざるを得なかったわけです。わたしにしましてもかなりショックであったわけですが、このことはわたしが絶えず予期しないリスクを抱えることが含まれました。つまりのところ、わたしが通常想定される治療的技法からはみだすといったことであります。すなわちそこでは、自分がもはや必要なバウンダリーを設定することを諦めてしまっているのやら、もしくは臨床的要請に見合うような創造的な試みをしているのやら、どちらだろうかと大いに煩悶を抱えながらあれこれ模索してゆくことになったわけです。例えば、ティムは折々に絵を描きました。それも事実、彼は絵の才能があったといえるのですが。彼はわたしに絵の具が欲しいと言いました。そして私はそうしようと決めたわけです。もちろんそれでどういう事態を招くかについては大いに懸念があったのは間違いないのですが・・・そうしますと、彼は絵の具にそこそこ興味を覚え、それに反応しました。しかし、彼は画用紙にそれらを塗ろうとは致しませんで、小さめのテーブルがあったわけですが、それをひっくり返し、その裏側の底板をキャンバスにしたわけです。疑いなく、絵の具で何かしら描こうという意図があったのは確かです。そして彼は、取り掛かる前に絵の具の色を混ぜ合わせてゆきます。わたしとしては、それら彼が描いたものを後でどうすべきか、拭き取ってしまっていいものかどうか判断に迷いましたが、ともかく、彼が永久保存の意味で絵を描こうとしていること、それがわたしの部屋にずっとあって、それでセッションとセッションの間にも私のところの中にあると、彼がそのように思い込もうとしている、そうした彼の明らかな真意についてあれこれ語りまして、その後で、絵はそのままにしておくわけにはゆかないこと、そして

テーブルも綺麗に元通りにしなくてはならないと言明したわけです。わたしはそれを彼がどうするか任せることになりました。事実彼はとても素敵な絵を描いたのです。そこには明らかに、彼が自然を大層好む傾向が窺われました。つまり、わたしが部屋に置いていた鉢植え、窓の外に見える樹木などが実に丁寧によく吟味されて描かれておりました。実際のところそうしたものは、ごく稀ながらも時折われわれと一緒にいてどうにか穏やかな接触を保つ上での媒介物としてあったわけなのです。

もう一つ難問がありまして、それを解決しなくてはならなかったわけですが、極めて興味深いものでした。ティムは、或る日到着した時点で、部屋のなかの全ての家具を移動させ、まったく新しい配置にしたいと決めたわけです。それは‘バリケード’みたいに手当たり次第に家具類を無造作に積み上げるといったものではありませんでした。部屋全体を再デザイン化するプロセスであったのです。そうするには、いつもは窓際の手前に設置されてあった、わたしのかなり重いデスクを移動させなくてはならず、そしてそうするには彼一人では無理で、わたしに手を貸してくれというわけなのでした。そこでわれわれは二人組の運搬作業員よろしく、セッションの始まりには家具類を別の位置へと移動させ、セッションの終わりにはまた元通りの位置に戻すといったことを、数ヶ月の間毎回やったわけです。つまり、そのように、すべてがセッションの終わりの時点で元通りにしなくてはならないということを彼に予め説明したわけです。勿論彼は怒って大いに抵抗したわけですが。彼は結局妥協し、これは取引だということでようやく受け入れることにしたわけで、その後全面的に彼は協力的になっていったのです。このリフォームしたスペースに於いて、彼は自分がデスクの上に座りたいと言い、その側^{そば}にどうにかわたしがうまく収まるような場所をも入念にこしらえてくれました。その位置からですと、彼が何しているのかわたしにも見て取れたわけです。それで結局のところ、こうした行動をとおして彼は、自らの世界を構築する上で己自身にも何らかの役割を担う権利があるということをわたしは認めなくてはならないと主張したのだということ。それをわたしは感じ取ったわけです。ここで、歩き始めの頃の子ども(toddlers)が想起されましょう。そして、そのごく普通の万能感が頓挫した状況について大いに考えてみたわけです。つまり原初的愛対象(primary love object)やら家庭(ホーム)といった感覚を喪失した子どもという意味ですが。そこでは、言うなれば子どもの自立があり、そして大人の権威もあるといった現実^{現実}に徐々に少しずつ順応してゆく代わりに、外傷的な‘封鎖 disruption’があるわけですし、そうした場合、子どもの彼が自分の思い通りにモノを並べ変えられるといった信念など粉碎されてしまうわけであり、セッションにおいて、この時期、彼はこの新しいバージョンに取り組もうとしていたということをわたしは感じておりました。つまりのところ、彼は自分がまったくコントロール不可能な事態にただ自らを組み込ませ適合する必要はないということであり、またそうした事態を逆転させることも出来ず、ただ無能感とその鬱憤をわたしに肩代わりさせるといったことではもはやなくなっていったわけであり、彼がわたしの部屋で居心地よく過ごせるには、さまざまな意味でわたしのサポートに依存しておりましたけれども、彼自身にとってもくつろげる良い場所とするには、彼自らがそうしようところをしっかりとその気にさせねばならないわけで、その点でこれは彼の積極的な意志的選択でもあったわけです。

もう一つこのテーマのバリエーションがわたしの所有する観葉植物の鉢植えへの彼の関わりに窺われます。彼は、いかにも威張ったふうに、わたしが鉢植えの植物の世話を怠っていると批判しまして、もし水遣りをしてやらなければ、枯れて死んでしまうのではないかと語るのです。それで水遣りがかなりの期間続行されたわけです。私にしてもそこで起きている出来事にバランスを見極めるにはしばらくかではなかったわけですが、彼が興味を覚えて植物を観察している中で、新しい芽が出たやら古い葉が枯れて落ちただのといったことが展開してゆきました。そして彼はいかにも知ったかぶりして、挿し木について語り、どうやってそれをするのかを縷々喋ることがありました。それが或る日、偶然にも彼は窓際の棚の隅に一個の未使用の空きの植木鉢を見つけたのです。そして、挿し木したいから、それを使わせてくれと懇願しました。あれこれ話し合ってから、わたしは翌週のセッションにいくらか土壌を用意することを提案します。それで、もしそうしたいと思うならば、挿し木もいじらうと許可したわけです。事実翌週にこれを彼はしたのです。勿論わたしとしては幾らか混乱した頭の中で、一体何でわたしがこんなことをする羽目になったのかとあれこれ沈思黙考していたわけですが…。その挿し木された小枝がしっかり根付くかどうか、もしかしたら枯れてしまうかも知れず、今やセラピーの行く末にあまりにも要らぬ期待やら不安を伴ってしまったように思われたわけです。だとしても、わたしとしては、わたしが日頃堅持するセラピーの規範に逆らってまでもこうしたリスクを抱えることを、彼はどうやら必要としていると思わずにはいられなかったのです。傷つきやすい脆いもの(挿し木、彼の幼い自己、彼のわたしへの信頼感)をどのくらいお世話する能力が彼にあるのか、それについてわたしがまるで信頼していないように彼が疑っているといったことを解釈するのは、この時点では到底適切とは思われませんでした。

わたしはしばしば、セラピーの終わりには、子どもが自分で描いた絵やら小さな玩具を家に持ち帰ることを容認することがあったわけですが、ティムは、どうにか根付いて大きくなった‘彼の’鉢植えを家に持って帰ることについてわたしと交渉を重ねたわけです。何週間もこの件では二人の間で応酬が続いたのです。それは‘われわれのもの’なのか、‘わたしの’なのか‘彼の’のかといったことを認識することの困難が問題とされたわけです。それで、わたしは最終的に彼の希望を受け入れました。当然ながらこのことが、わたしが彼に提供してきたものについての理解をワークスルーするプロセスの妥当な結果と言えるかどうか不確実でしたし、また、その植物が、彼が自宅に持ち帰ってから実際に大丈夫育つかどうかも疑わしいわけですし、そして創造的な成長(creative growth)といった観点からして、この植物の比喩(メタファー)にあまりにも多くの意味づけが為されてしまったことも些か案じられたわけです。

どうにかしてティムを破壊的ではない遊戯へとその能力を導く手立てはないかというのが、わたしにとって依然として問題として持ち上がるがあったわけです。他の例を挙げますと、彼の水遊びでした。彼はわたしのハンドソープ液の瓶を一度水屋の下から見つけ出し、それで泡立てることを大いに喜んだわけです。そして、それらの泡を太陽の光にかざして眺めるという遊びに情熱的に没頭して楽しむことがあったのですが、それは、審美的なものを享受し歓ぶことが出来るということをわたしが彼の中に認めた最初でありました。しかし勿論そうした遊びも、こちらがつい気を許していると、床をビタビタに水浸しにするし、わたしにわざと水を振りかけるといった攻撃にもなりかねなかったわけです。希望そして絶望

といった行きつ戻りつを、最初の2年間のほとんどのセッションに於いて、わたしは直面しなくてはならなかったわけですが、それこそがセラピーに於ける重要な糸口でもあるということを知ることができたわけでした。わたしは、彼自身のある部分に於いてはまだ希望的であることが可能なように思われるのですが、しかしまた、徒労感とか絶望感、それで自暴自棄といったことに圧倒的に打ち負かされてしまうことがあることも重々承知しておりました。彼の性格の中では‘シニシズム(冷笑的性癖)’の傾向は顕著でありまして、それは、延々と執拗にひきずられた心的動揺がもたらすところの強烈な苦痛に抗しての彼なりの防衛でもあったわけでした。それは、あまりにも多くの感情やらあまりにも多くの傷^{いた}みに晒されることから、すなわちその極めて‘薄い皮膚の経験(a very thin-skinned experience)’から‘厚い皮膚への退避(a thick-skinned retreat)’を表象していたといえましょう。

自己(the self)内のそれぞれの部分同士が、さらには自己と対象との間に於いてもコミュニケーションが達成されることを、わたしは原則的にセラピーワークに於ける目標としております。そして驚くことではないともいえませんが、このことがコミュニケーション形態において独創性というものをも求めるのであります。因みに、わたしは彼にごく普通に話し掛けることなどごく稀にしか出来なかつたのですし、そしていつもしばしば使い慣れたセラピー上の方策なども全然功を奏することはなかつたわけでした。例えば、<男の子というのはこんなふう^のに思うものだ・・>とか、もしくは<こういう男の子がいたのを知ってるけど・・>といった誰かが語ってくれているようなこと、そしてセラピスト中心主義的な解釈など(Steiner,1993)の一切が無効であり、何ら事態を動かすことはなかつたのです。しかし時折ですが、偶然のチャンスが遊びをとおして突然現れることがあります。例えば、或る日ティムは‘トイ・電話’を作ろうと言い出しました。2つのポリスチレンのコップ(それもわたしの部屋の水屋の下から偶然見つけたものですが)、それから糸でもってこしらえました。それで彼は、このわたしとの距離を隔てたコミュニケーション・システムを喜びました。そして、この方法でもって、わたしが彼に極めて自由に語ることを許容できたのです。同様にして、ダートのゲームをしているときに、或る遊びがそこから発展しました。彼はわたしのほうにメッセージの書かれてある投げ文をダートに縛りつけ、わたし目掛けて投げて寄越したわけでした。大概は罵^{のし}りの言葉でしたが、時としてはそれ以上の何かが書かれてあり、そして同じくわたしからも投げ文を返してもらうことを悦んだのであります。その文にはわたしからの解釈的コメントが書かれてありましたわけですが。全体的に見て、彼は、わたしが彼に語り掛ける折、声の使い方に随分と気をつけねばならない男の子でありました。ゆっくりとしゃべること、それに極めて静かにです。特に苦痛に満ちた事柄について語る時などはそうでした。それはまるで離乳食を赤子に1回ごとにスプーンを口許へ与えるときにも似たように、スプーンを与える間隔も充分置くといったふう^のに・・。つまり新しい思考をゆっくりと飲み込んで、しっかり消化する時間が十分に与えられねばならないわけでした(Meltzer,1976)。電話とダート・ゲームといった遊びについて言えば、彼にしてみれば、それでわたしとの距離を保つことが出来たわけでありました。われわれはそれぞれ離れて部屋の隅に立っておりました。それで、わたしが彼のほうを見たり・見なかつたりと、その都度彼はからだの向きを自在に選ぶことも出来たのであります。

このような子どもに於いては、いかなる心的苦痛をもその苛烈さゆえにこころに寄せ付けない状態にあるわけですから、パーソナリティーの‘ボーダーライン的側面’が増長されてゆく傾向があろうかと思われれます。そうした場合、「抑うつポジション」の回避はしばしばこころのサバイバル(psychic survival)にとって決定的となりましょう。自己に於ける罪悪感そして責任感を認めること、迫害的对象そして理想化された対象のスプリットが緩和されること、そしてその結果もたらされる、よりいっそう現実に根ざしたところの判断力が切り拓かれてゆくこと、そうしたことはおそらく誰にとっても甚大極まりない心的労苦を要する課題でありましょう。原初的愛対象(primary love objects)の過誤および裏切りといったことについて考えることの苦痛は、子どもにとっては紛れもなく苛烈で恐るべきものであるに違いありません。‘真実を見ること’を避け、それで盲目(a blind eye)と化した対象との深刻な同一化(Steiner,1985)を克明にじっくり探索してゆく時間は、普通‘被虐待児童’のセラピーの核心であろうかと思われる。それはティムの場合がそうであったように・・・。

抑うつ; 成長を阻む挫かれたこころ

ここで二番目に私が語りたいと思います症例は、セラピストとしてのわたしに極めて相違する問題を突きつけたといえます。ウェイン(Wayne)というのはアフリカ系カリブ(Afro-Caribbean)の14歳になる男子でした。わたしが最初に会ったときは、彼はフォスター・ケアの家庭で暮らしておりまして、軽度の学習困難を抱える子どもたちのための学校に通っておりました。彼は実母と8歳になるまで一緒に暮らしておりました。そして、その時点で彼は遺棄され、その地域の福祉事務所(social services)に委託されたのでした。わたしは、この事実をセラピーが一年以上も過ぎた頃によく知らされたのです。彼が信じるころでは、彼女が何らかのトラブルに遭い、それで彼を一時的に福祉事務所に預けて姿を消したということであり、その後彼を迎えに来ようとしているのに、いつもどこかで道を見失ってしまうということでした。彼は、彼女が今でも自分のことを探していると信じており、だのに、どうしていいのやら途方に暮れているといったわけです。ありとあらゆる事故やら障害が、二人が再び一緒になることを妨げているということ、そんなふうに彼は感じておりました。福祉事務所がどこか別なところへ移転したとか、彼女がその日到着したときには終了していたとか、メッセージを置いてきたのに、それはどこかへ紛れ込んで無くなったとか。彼は、まるで生涯ずっと辛抱強く待ち続けていなくてはならないといった印象がありました。その一方で、彼は父親とは連絡を取ることもありました。父方の祖父そしてたくさんの兄弟たち、そして叔父・叔母たちです。それら子どもたちは父親と別の女性との婚姻で儲けられたわけで、つまり彼にとっては腹違いの兄弟ということですが、彼らは兄弟と呼ばれておりました。殊に、彼の若い母親と一緒に暮らしている、4歳か5歳かの幼い男の子は重要なようであります。そして、彼らが Barbados へと去って行った時には、ウェインは明らかにすっかり意気阻喪しておりました。

ウェインは、セラピーが必要であろうということで紹介があったわけですが、それは彼の抑うつ傾向がかなり顕著だったからであります。彼はひどく悲しげな男の子で、いかなることにもいかなる感情をも表わすことのまったくない、情緒的にまるで不活発な子どもであったのです。彼の限られた知能はその抑うつの深刻さに密接に関係づけられていたようであります。彼の生命をつかさどるシステムはまったくのこころ

閉鎖状態であり、ただそこに居るといった、辛うじて生きているだけの状態に甘んじているふうでした。彼はごくゆっくりと物憂げに歩きますし、彼の身体はもたついた調子で、彼の顔は無表情でした。そして彼はほとんど言葉を発することがなかったのです。彼の寡黙が問題視され、そこで彼の特別支援学校でスピーチ・セラピーが用意されました。しかし彼の場合、ところが極めて低いレベルに陥っていて何ら機能しないといった子ども、つまり事実自閉症に近い状態とも見えました。彼は実際に、完全な生命のない(lifeless)不活発(惰性)の中にあってもまるで平気なのです。恰も無時間の世界の中にいるかのように、かなり長期に亘って、微かなからだの動きもなく、声を発することもなしにジッと座り込んだままで過ごすことが出来たのです。

わたしが彼と会ったとき、遺棄された心的外傷が、彼の状態の全く基底にあると見えたわけですが、それは不幸なことにセラピーのセッティングでも反復されております。前任者のセラピストの都合で、予期しないかたちで早すぎる終了がなされたのであります。ところがその最後のセッションでのこと、彼女にとって、そして彼女のスーパーヴァイザーにとっても驚きでしたが、生命の動きなどが皆無であった、長い何ヶ月もの後で、なんとウェインは敢然とヘルプ(助け)を訴えたのであります。それらの言葉はわずかであったにしろ、セラピストはパワフルな投影同一化に捕えられ、それで是非とも誰か新しいセラピストを探してあげなくてはと彼女に決意させたというわけなのであります。だが、ウェイティング・リストからして彼にセラピー再開のチャンスはなかなか訪れませんでした。数ヶ月も待たされたのです。それから、わたしがこのケースを引き受けるという事態がようやく訪れたわけなのです。

この論文の冒頭で、わたしは心的外傷の傷痕がそのままセラピーの部屋に侵入してきたら、どういことが起こるのかという問題点を提起したわけですが、このケースに於いては、実に問題とは、わたしの患者のその深刻な‘受動性’の程度にありました。それで、いっその事そうした死んだように虚ろなこの状態へと一緒に流されてゆくか、そこでは生命のありとあらゆる感覚が衰弱してゆくわけですが、もしくは苛立ちを抑えきれず、逆転移のプレッシャーに圧倒されるあまり、彼をあれこれ小突き回し、なんとかして反応を引き出そうするかのどちらかといった、否応もなしにそうしたインパクトをわたしに与えたわけであります。いずれにしても彼を揺さぶろうとすれば、明らかに逆効果でありましょう。というのは、彼を観察してみて分かったことは、敢えて彼を活気づけようとしたり、懸命にこころを煽ろうとしてわたしが如何なるコミュニケーションを試みても、いっそう彼は自分の殻に閉じこもって出てこなくなるだろうということでした。雲隠れしてしまうわけです。そういうわけで、彼とともにあって、わたしの中でどうか興味を持ってそうに感じられる感覚やら、セッションの中で何かしら見るべきものがあるといった期待感を維持してゆくのは極端に困難なものでした。こうした状態をわたしの患者による非言語的にコミュニケートされたものとして理解することを試みてはみたものの、わたしは圧倒され、こころは虚ろと化すばかりで、彼に何かしら意味ある事柄を定式化するかたちで明確に語ってあげられることなどまるで思い浮かばず、途方に暮れるばかりなものでした。フィーリングについて語るにしても、それがどんな類いのものであろうと、彼には脅かしとしか感じられないようでしたし、そもそもそうした語り掛けそのものが、彼にとっては恰もまったく

の外国語で、何を言われているのかチンプンカンプンといったふうなものでした。どれほど彼に語る解釈を単純化し、分かりやすく言い表したとしても、言葉がまるで通じないのです。

こうして‘彼に通じた’といった感覚を何ら持てないまま、強烈な孤独感をわたしは彼と一緒にいて感じたわけですが、それはまさにウェインに取り付いた‘生命の薄さ’というものに加味されていたものといえましょう。彼の担当のソーシャル・ワーカーは彼がセッションに通えるようにクリニックまで付き添ってきてくれました。わたしはセラピー開始前に、一度だけフォスター・マザーにも会っております。彼女は、いかにもおばあちゃん風なタイプで、実際成人した子どもたちそして孫たちに囲まれておりました。そして権威筋が示唆することにはひとまず従うところの用意があるといったふうでした。しかし、彼女とウェインとの間に生き活きた交流などあったとは感じられなかったのです。セラピーでの経験から、直に彼女が彼との関係性をごく限られたものにしておくといった及び腰の理由を幾らかなるほどと了解したわけであり、ウェインのソーシャル・ワーカーにしてもセラピーを始めて間もなく去りました。わたしが福祉事務所にどれほど電話をしても、手紙を書いて送っても、それはどうやら有耶無耶にされてしまうようでした。最初の休暇を迎える前にセッションに連れてこられることがなくなってから、ウェインの件で援助を期待できるような誰とも繋がりがまったく断たれてしまったわけです。フォスター・マザーはジャマイカへと長期滞在ということで出掛けてしまっており、ソーシャル・ワーカーもいなければ、ウェインもわたしからの手紙に何も返事をしてこないのです。もうどうしようもない、万事休すといった、‘無能感の再現’といった感覚は途方もないものでした。それも、わたしが彼にクリスマス休暇について語った翌週のセッションなのでした。彼はセッションに現れませんでした。わたしは、彼はわたしが彼を置き去りにすると感じているのは確かだろうと思いました。これまでも外界に於いて潜在的に親的責任を任じるところの人物は誰もが皆そうだったわけですから…。

再び生の感覚を取り戻すこと

こうして、一学期の間、わたしは福祉事務所もしくはフォスター・ファミリーからの反応を得ようと腹を立てながらも躍起になってやれるだけのことはやろうとしたり、一方ではそれも無益かと絶望感を抱いたり、心の内でスッタモンダし、もはや諦めかけていたわけです。ウェイティング・リストには待たされている子どもたちがいっぱいいましたし、事実他からの要請もあり、彼に与えていた時間帯を彼のためにこのまま確保し続けるのは現実的に難しくなっていたわけです。それに、セッション中に一体何が起きているのかと興味を持ち続けることはまったく苦痛でしかなくて、努力の報われることのなかった記憶が蘇ると、それとも重なって、いよいよ諦めたほうがいいのではないかという気持ちに傾きつつあったわけです。でも、どうにかわたしはそうしなかったのです。そして彼のセッションの時間をそのまま開けておいたわけです。そして思いがけず、突然或る日のこと電話がフォスター・マザーの娘という人からあったのです。母親が旅行中の不在の間、彼女が家のことを任せられていたようなのですが、彼女はウェインについてとても気掛かりだと告げました。彼はクリニックに通うことが必要だし、それで幾らかでも自分を表現することが援助されるのではないかと考えているとのことでした。彼女は翌週彼を連れてくると約束しました。そしてかなりの遅刻ではありましたが、彼らはどうにか到着しました。フォスター・シスターはとても綺麗な、エネ

ルギーに溢れた、生き活きた若い女性で、彼女は二人の幼い18ヶ月と3歳の子どもらを連れておりました。一方ウェインは、背丈は伸びて大きくなったものの、以前と比べても相変わらず弱弱しく疲れ切った風情でした。残り時間は僅か数分しかありませんでしたし、われわれが会ってからもう何ヶ月も間が空いておりましたから、わたしはウェインとそのフォスター・シスターも同席してもらい、セラピーを今後どうやって再開させてゆくかを一緒に話し合うことにしたのです

それから続く数ヶ月の間、セラピーの打ち切り(death)といった、きわどい危機状況はありませんでしたが、もっとも幾つか数限りない小さな反復といえるものはあったわけです。しかしここでわたしは、わたしがどのようにセラピーを機能させてゆくようになったのかという側面について描写を試みてみたいと思います。わたしはまずは、彼との接触を図ろうと汲々としがちなわたし、それとは対照的に無気力に押し黙り、黒い煙幕の向こうに退避している彼、そうした双方のアンバランスについて、よくよく検討してみようと思ったわけです。わたしは極めて自覚的に、彼に語りかける言葉遣いを極力ゆっくりとさせてゆきました。語る文脈をもごく単純化し、彼からの反応がありはしないかどうかを見定め、あることを前提にしてかなりの時間じっくり待つということをしました。ウェインが^{つぶや}呟く言語的なコミュニケーションのどのような断片も一つ一つ丁寧に拾い、積み木のように使ってゆくといったことです。われわれは、彼にとって考えることがどんなに難しいかということから会話をスタートさせました。彼の‘思考を失っている’といった経験(his experience of losing his thoughts)について、それは時折セッションの中でも起きていることをわれわれ双方とも熟知していたことだったわけですし、その彼の‘失われた思考’をわたしは何とか彼にとっての情緒的意味づけに結び付けようと努めていったわけでありました。そこから、ごく僅かな瞬間瞬間に自発的な動きが見られ、それらをウェインの不毛と化したようなところに於ける、幾らかでも成長する^{きざ}兆しの証拠として、不確かながらも、わたしの心の中に大事に蓄積させていったわけなのです。

やがて新任のソーシャル・ワーカーが登場します。そしてクリニックへウェインが一人で通ってくるのが出来るようになるのではないかという考えをサポートしてくださり、そのように手筈をしてくれたわけです。彼は今や16歳になっておりました。そしてカレッジに行くことになっています。多くの浮き沈みはありましたものの、どうにか遣り繰りできることになったのです。それで、クリニックへの道筋で彼の身にどんなことが起きたのか話しをさせることができるということになったわけです。彼は大概のところかなり大幅に遅刻することがあり、そこでわたしはどんなことが起きたのかを彼と一緒に考えていったわけです。彼はカレッジを出たとき(おそらくその時点で既に遅刻は明らかでしたでしょう)、まずそこから説明し始めます。そこからどの列車に乗ればいいのか、どの駅だったかと混乱してしまうやら、つい通りがかったお店に気が奪われることなども。或る週のこと、彼は病気になる、そしてわたしがびっくりし悦んだことには、クリニックに電話をしてきて、セッションに来れない旨を自分で伝えたということがありました。彼の後からの説明では、わたしが彼は一体どこにいるのやらと気を揉んでいるに違いないと思い、だから彼の身に何が起きたのか知らせておきたいと思ったんだということでした。また別の週のこと、彼は珍しくも定刻どおりに到着しました。わたしが彼を伴い、わたしの部屋に行く途中の廊下で、彼がそこにあった壁の時計にチラッと目を遣るのを目の隅で認めたわけです。どうやらわたしが彼を待合室に2分程待たせたことでわた

しを咎^{とが}めているのは明らかでした。事実、緊急の電話が入ったためつい彼を待たせてしまったわけなのです。それについてわたしが言及しますと、そうだと彼は認めるような仕草をしたわけでありませう。

或る日のセッションに於いて、心的外傷を負ったその存在の半分ほどが埋没していた殻^{から}からとにかく彼が抜け出てきたかのような、そして彼自らのメンタル・ライフに幾らかなりとも接近し始めているといった感触を、わたしはふと掴んだ気がしたのです。彼はクリニックへの行程について語っておりました。ちょっと微笑んだふうにして、彼はカレッジに必要なある物を買うのに文房具店に入ったということを語りませう。それでクリニックには遅れるのではないかと気づいていたということ。それで彼は、わたしを待たせることを敢えて選んだ攻撃的側面については内心薄々感づいているように見受けられました。そしてフォスター・マザーが自宅で彼に何かを頼んでもすぐ忘れてしまうといったことに関連づけませう。彼が語るには、言われてすぐ立ち上がって、言われたとおりのことをしようとするだが、何を言われたのか忘れてしまっているわけで、それで結局言われたことが出来ないというわけませう。われわれは、かなり長い間、この後駅で起きたことが何であったのかを語りませう。彼はジュビリー線の列車に乗らなくてはならなかったのですが、そこで Uxbridge 行き(つまり逆方向)のメトロポリタン線の方に興味を持ったわけませう。彼はちょっと考えてみたわけませう。列車はどこから来るのか、それらはどこへ向かってゆくのかって・(まるで小さな鉄道マニアの男の子みたいに)。それらを眺めながら、彼はジュビリー線の列車に乗り遅れるということに気づいていたのですが、二本の線路のほうにむしろ彼は好奇心をそそられたというわけませう。

わたしはここで、彼がいつも‘忘却 forgetting(彼のこころの中のブラック・ホールに投げ込まれた何か)’として経験されることからのプロセスが、能動的な意味での‘背を向けること turning away’になっていることが認められたのでありませう。わたしは彼に、ウェインを置き去りにし、逆の方向へといってしまう人物との同一化を彼に描写してあげることができるように感じられました。つまりセッションの最後での Mrs.ラスティンがそうであるように、そして昔母親がそうであったように・。それで彼はここへ来たいとも思うし、わたしと一緒に居たいと思いつつも、立ち往生し、そうして彼のセッションのほとんどを失う羽目に陥ったというわけであり、つまりのところ、‘忘れられた人’になるよりは、‘忘れてしまう人’になるほうがずっとましといったことなのでありませう。しかしここでもっとも興味を覚えることとは、思考に2つの筋道(線路)があるということなのでありませう。2つの線路みたいに。同時に、ウェインの内なる視界(ヴィジョン)にはそれが見えていたということませう。まるっきり無思考な(思考の根こそぎされた)感覚が、一時的にしろ、‘どれ’とか‘どっち’とか、つまり選択すること及び方向性の違いなども見えてきて、それで一つを選べばどうなるか、もう一つ別のを選べばどうなるのかと、その当然の帰結にも意識が向けられ、そんなふうにならぬかの考え(ヴィジョン/vision)に取って変わられたのでありませう。

この男の子が母親に遺棄された時点で経験したであろう憤り、恐怖、憎悪、それからその結果としての罪責感があまりにも凄まじく恐ろしいものであったがゆえに、こころをほとんど完全封鎖してしまったということは大いにあり得るだろうと思われるのでありませう。治療中、事実‘遺棄の再現’にも似たような事態にならぬかと陥ってしまうことは結構あったように思われます。ごくわずかに、それはセッションの中でも、そ

してセッションとセッションの間でもありましたし。さらには、もっとはっきりしているのは、わたしがセラピーを維持してゆく上で幾度となく‘孤軍奮闘’を余儀なくさせられたといったことや、そしてしばしばいっそ諦めたほうがいいのではないかといった弱気にしばしば駆られることがあったといったことであります。わたしが言及するところの‘パワフルなフィーリング’とは、大概のところは誰でもない、わたしの中にむらむらと込み上げてくるものなものでした。福祉事務所の不首尾な対応についての憤りがそうでした。例えば、まったくのところ性懲りもなく何度も同じことが繰返し起きており、すべてが遅々として捗らないわけで、それでどうしようもなくやり切れない思いを覚えることになり、またわたしがそこに垣間見たところの‘受動性’はまったく我慢のならないものがあり、それでわたしの攻撃欲 aggression をこころの底辺でくすぶらせていたわけなのです。わたしは、‘奴隷化された人々’そして彼らに権限を行使する‘ご主人さま’との間の力動関係性を時として強く意識させられることがありました。しばしばまるっきりすべてがわたしの肩に掛かっていて、ウェインには何もないようでした。つまり、すべてがわたし次第で、彼はどうでもいいといったふうな。。そんな彼のようにダンマリを決めた受動的な患者とのセッションでは、死ぬほどの退屈さ、そして‘空疎’というものにわれわれは直面しなくてはならないわけです。それは、人の平静さを失わせるほどの極めてゾットするような恐ろしい挑戦なのであります。人生を無駄にすることに何ら怒りを覚えないとしたら、その人は命取りの‘共謀’へと導かれてゆくでしょう。そしてそこから、生きた子どもの遺棄が性懲りもなく延々と引き起こされてゆくわけであります。もしそうした患者にその災厄に砕かれた思いを自由に語らせることが出来るとしたら、それは無理な相談なのですが、おそらく彼はこう言うでしょう。自らの生が彼の母親の喪失に責任があったと。。彼女は彼に対してどうにも出来なかった。なぜならば、彼は彼女にとってあまりにも負担すぎた too much のだからと。。そうしたことを固く信じて止まないとしたら、それでももしも誰かにすがってもいいといった希望があるとしたら、唯一せいぜい人畜無害のおとなしい‘ネズミちゃん’でいなくてはならないといったことになりましょう。

総括

ここで改めて「セラピストが窮地に立たされる時」というテーマに戻り、意義深い特徴を幾つかの点に絞ってお話してみたいと思います。既にお分かりのように、実際に重要な点とは、この‘窮地に立たされる’という状況、その居心地悪さということでありますが、それがまさに子どもの深層に於ける困難にかなりの部分関係しているということなのです。敢えてこうも言ってよろしいかどうか、心的外傷を抱え込む患者たちは、外傷的であり得る状況をセラピストにどうにか耐えて生き残って欲しいと願っている、そうしたニーズが彼らにあるということなのです。問題の核心とは、セラピストの味わう恐怖とは、実にその瞬間、子どもの対処しきれずに抱え込んでいる恐怖の反映された‘写し絵’なのだということです。従って、誰か他の人が、つまりセラピストが、その恐怖に対処し得るだけの資力を備えているかも知れないといった、子どもの希望、そしてそんなことはおそらく誰にも出来っこないといった、子どもの恐怖のどちらもがそこに歴然と封じ込められていると言えましょう。元々の外傷体験とは、さまざまな出来事のコンステレーションであります。例えば、誰もティムの母親の世界に於ける暴力もしくは倒錯をコントロールできなかった、そしてコントロールしなかったということ。また、母親の中の内的リソースが子どもに心的外傷が侵食することから身を守ってやるにはあまりにも不適切であったとか。ウェインの母親の場合

にしても、その心的崩壊を防ぐ上でサポートしてくれる誰もいなかった。そして彼の子育てを継続して可能にするための援助ももらえなかった・・といったように。でありますから、セラピーは‘セカンドチャンス’というやり直しの機会が与えられる場と考えたいわけです。外傷体験を面接室の中に、セラピストとの関係性の中に招き入れることであり、そこからわれわれは異なった事態を創造してゆくことが出来るかも知れないのです。こうした必要な任務を安全にするためには、われわれには十分な時間が与えられていること、そしてわれわれ自身に適切な個人的および職業的なサポートがあるということ、それらは手堅く確保しておかねばなりません。わたしはここで2つの症例で経験したことをご覧いただいたことになるわけですが、それらはどちらも週一回のケースです。それというのも、たとえ週一回のセラピーであったとしても、まっとうなレベルでのセラピーは可能であり、もしも必要な条件が充たされるならば、それなりに良い結果に辿り着くことが可能だということをぜひとも強調したいと思ったからなのです。

(訳出; 2020/07/05)

※補記;この論文は、タヴィストック・クリニックで開催されたカンファレンス(1999)に於いて発表されたものです。此の際のテーマは、「Trauma, Play and Recovery(トラウマ、遊びそして回復)」でした。尚、この後に、Sao Paulo(サンパウロ/ブラジル), Bristol(ブリストル/イギリス西部)そして Belfast(ベルファスト/北アイルランド)の地に於いても発表されました。

※参考文献:

Alvarez,A. (1983) ‘Problems in the use of the counter-transference: getting it across’.
Journal of Child Psychotherapy, 9(1) : 7-23.

Meltzer,D. (1976) ‘Temperature and distance as technical dimensions of interpretation’
In Sincerity and Other Works.London : Karnac,1994.

Steiner,J. (1985) ‘Turning a blind eye : the cover-up for Oedipus’.
Int.Rev.Psycho-Anal.,12 : 241-51

Steiner,J. (1993) ‘Problems of psychoanalytic technique : patient-centred and
analyst-centred interpretations’.
In Psychic Retreats. London : Routledge.

【訳者あとがき】 ～リベラルな魂とは～

山上 千鶴子

ここでマーガレット・ラスティンについて、私の個人的な思い出を語ろう。私のタヴィストック在籍中、彼女は私の個人指導教官 (personal tutor) であった。訓練生 (trainee) である私を監督指導するお立場で、私が参加するセミナーを検討するなり、トレーニング・ケースを調達するなり、修了まで傍らで見守ってくださり、その間勃発したトラブルのあれやこれや処理一切のお世話をしてくださった。誠に私にとって深い恩義のあるお方なのである。Mrs. ラスティンはとても聡明な、楚々とした佇まいのお方であった。いつもながら、こちらが提示するものにまっすぐに向かい合い、よく傾聴し、よく吟味し、よく熟考し、的確に返答した。その思考の筋立てにはまるで危うさがない。迷いの翳りもない。私は、彼女に全幅の信頼を寄せていた。

そもそも私が彼女と直接的な関わりを持ったのは、タヴィストックでの訓練生として受け入れられた最初の頃、つまりPre-Clinicalのコースに居た折のこと。その当時、私は、児童養護施設「ホリス (The Hollis)」のアシスタント・ハウスペアレントの仕事に就いていた。そこでの経験に些か窮する思いがあって、マーサ・ハリスに個別スーパーヴィジョンの必要を訴え、マーガレット・ラスティンに繋がったという次第。毎週彼女のご自宅のあるKilburnに通った。ところが、鉄道ストライキが連日連夜続く混迷した事態となり、Tooting BroadwayからFinchley Roadへの交通網が遮断されてしまい、タヴィストックのセミナーに通うことも実質上不可能となり、結局半年余りで私は「ホリス」を辞職することを余儀なくされたわけなのだ。その最後のセッションで、彼女は私に、<とても辛い経験でしたけれども、十分に学ぶものがありましたわね>と優しく言葉を掛けてくださった。私は頷いた。が、内心自分みたいな‘半人前’などなんぼのもんか。「ホリス」の子どもら一人ひとりの人生の苛酷さを思えば、あの経験を辛かったとほざくなど、自分という人間はとことん甘っちょろいのだということは分かっていた。だが、Mrs. ラスティンは終始私に寄り添ってくださり、何かしらを互いが共有できたかのような気がしたわけで。最後に<ご一緒できましたこと、とても嬉しく思いますよ (I'm very pleased to have worked with you)>とおっしゃった言葉に、私はひとまず慰められた。

児童養護施設「The Hollis」は‘パンドラの箱’だった。だが、がっちり錠が掛かっていた。つまりはありとあらゆる禍いや災厄が蓋されたまま、一応の‘秩序’が保たれていたという意味だが。小舎制で、広大な敷地にコテージが点在していたが、どのコテージの子どもらも、きちんと食べ物を与えられ、衣類も整えられ、小遣いも貰えて、学校に通っていた。一見して、それら措置されてきたどの子ども自らの置かれた場所をホームとして、決して親元に帰りがたがらなかった。そこそこ満足して暮らしている様子に見えた。私にしても、彼ら一人ひとりが一体どこから来て、どこへ行こうとしているのかなど問うこともなかったわけで。今ある秩序を維持する上で私は一つの‘駒’としてあればいいということではなかった。そこからタヴィストックの訓練生としての自分の将来を見据えていた。確かに私はあそこで子どもらに心を尽くし、出来る精一杯のことをしたかも知れない。だが、彼ら一人ひとりの人生に向かい合うことなぞ

ついぞなかった。スタッフの顔触れが変わるのは日常茶飯事だったから、私の退職そして不在が子どもらにとって喪失になると思えなかった。私なぞいつだって取替え可能というわけで。おそらくそれは事実だったろう。だが、ずうっとそれが心に引っ掛かっていた。子どもらの顔が折々に心に浮かんだ。それで或時、ふと思いついてネット検索をした。なんとまあ、「ホリス」は解体されていた！ サッチャー政権下での緊縮財政政策の煽りで、どうやら要保護児童らは施設収容ではなく里親委託措置へと福祉行政の方針が転換されていったらしい。じゃあ、バラバラにされて、一体あの子たちはどこへ行ったのか、と私は呻くように呟いた。そして一瞬、‘パンドラの箱’は開けられたのだとも思った。囲い込まれて、己を虚しくし、それでどうにかうまく飼い馴らされて暮らしていた子どもらの行く末が案じられた。あの子らに個々に自由というものの代償を払うどんな心の準備があったろう。ただただ混迷を深めたくらうと察せられた。そして、このマーガレット・ラスティンの論文に登場するTimそしてWayneが、文字通り‘彼ら’でもあった。根こそぎにされ、もしくは根腐れたままに放置されて空洞化していた、自己の「生の感覚」を真に我が手に取り戻す苦闘のドキュメント。ここに‘個’の誕生という奇跡が起きた。それも、傍らにMrs. ラスティンが一緒にいてくれたから。すなわち、そこでようやく「イナイナイバー」が始まったとは言えないか。「セラピーの要」とはまさしくそれだ。生きていくとは＜メックタ！＞の連続でなくてはなるまい。それらが自己に定着してゆく。「私なるもの」が‘根(ルーツ)’を持つ。個我の目覚めということ。そしてやがて、想像力に翼を得て、しばし現実下の軋轢から飛翔し、‘希望’との邂逅もあろうかしら。

あの聡明で冷静沈着な人が、セラピーでこれほどまでに子どもに翻弄され、心乱されるということ。そこに子どもの心の闇の圧倒的な威力が窺える。Mrs. ラスティンの孤軍奮闘ぶりは決してカッコイイとは言えない。通常の規範を遥かに踏み越えている。掟破りというか。どれほどご本人が困惑したか想像できる。推察するに、これは彼女のかなり昔に遡る、お若い頃のケースではなかったかと思うのだが。それでようやくこの経験をこのような論文の体裁にしたようなことではなかったか。彼女にこれら症例を公開することに躊躇があったとしても驚かない。だが‘見るべきものを見た’ということで、どうか彼女なりに結着を付けたのであったろう。ここに、彼女について私がかつて抱いた‘リベラルな魂の人’といった印象がいっそう強められた。改めて、その内に秘められたガッツ(根性)には驚嘆した。

私は、彼女について個人的な背景なぞ詳しくは何も知らなかった。それが最近、WEBサイト『メラニークライントラスト』でお写真とその輝かしい経歴が載っているのを目にした。どうやらご尊父はバプテスト派の牧師(a Baptist minister)で説教師としてもかなり著名な方であるらしい。それで、なるほどそうかと俄然腑に落ちた。あの彼女の‘分け隔てのなさ’は、実に彼の地の階級制社会において特筆されていい。いかにもミドルクラス出自といった知的エリートとは肌合いが違う。SnobとかPoshというのとまったく無縁である。生来の慎ましさ。それを涵養したのは彼女のご両親であったろう。私は彼の地で思ったものだ。精神分析とは自己欺瞞を暴くものであるといったお題目とは裏腹に、そこから誠実さが醸成されるところか、知の奢りが蔓延^{おご}ってゆく^{はびこ}ということ。聖書の言葉では「高ぶる人」だが。そうしたエリート主義に私は内心辟易^{へきえき}し、憎んだ。「主は知っておられる、知恵のある者たちの論議がむなしいことを」[コリントの信徒への手紙3. 20]という言葉もある。誠にその通り。勿論、その彼らの知略

の巧緻さという点ではまったくのところ私など及ぶところではないわけで。だが、精神分析家に‘人情味’を求めるほうが所詮無理なのかと悲しみが疼く。どうにも私にはそぐわない。「生」の息吹が感じられないのは虚しい。だがその一方で、《私のタヴィストック》は断じて違った。マーサ・ハリス、そしてマーガレット・ラスティン、またその妹分であったケイト・ポウル(＝バロウズ)の面々こそが懐かしい。どなたもが‘深く感じること’のお出来になられる方たちだった。ここで想起された彼女らの‘額’に、私はある刻印を見る。言うなれば、「神の僕」としての印。私はふと心動かされ、なぜか久し振りに聖書のページを熱心に繰っていた。そこに胸に響く言葉が飛び込んだ。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」〔ルカによる福音書9. 23〕「神の僕」即ち「義に仕える者」としての覚悟が問われてる。すなわち、<神は人を分け隔てなさらない、だとしたら、私も・・>ということになろうか。‘魂の牧者’ということ。この信 faith が、彼女らのなかに息づいている。聖書の言葉でいう「へりくだった人」。であればこそ、この論文に見られるように、マーガレット・ラスティンがTimそしてWayneと抜き差しならぬ因縁を結ぶということがあり得たのだと改めて思う。そして或る意味、この手荒い‘洗礼 baptism’ともいべき試練を経て、まさにそこから、やがて彼女の中に揺るぎない‘チャイルド・サイコセラピスト魂’のバックボーンが培われていったものと偲ばれる。すなわち、もし‘セラピーの子どもたち’一人ひとりに己の‘十字架’を正しく背負うことを励ますとしたら、そしていつか彼らが贖われるものと信じるとしたら、まずはわれわれも己の‘十字架’を背負うことにしよう、と彼女は訴えてはいないか。せいぜいわれわれも彼女に倣い、レジリエンスを高めてゆかねばなるまい。

私は、多くの歳月を経て、今こうして彼女にまた出逢えたことが嬉しい。帰国後2年ほど経てだったか、私宛に彼女から手書きのたよりが届いた。イタリアでの何かの会合を終えての帰途、飛行機の中でふと私のことを思い出し、書いたとのことだった。まるで音信のない私を案じてくださっておいでだった。だが、私は当時、自分の立ち位置を探しあぐねて昏迷状態にあった。如何せんまるで‘見せられない’私であった。それで返信が出来ずにいた。そのままずっと今の今まで音沙汰なしで来たわけで・・。そして現在、実は私は来年末で引退を予定している。それでつい最近のこと、《引退の辞》の草稿をしたためた。それは、私の心理臨床家としての最終総括になる。それで気持ちがすっきりした。己の立ち位置の見極めができた。これで少しは‘見せられる自分’になれたかと思った。だが、その文章で綴られた諸々の感慨は飽くまでも私個人に根ざしており、それは日本語でしか語り得ないものであり、その意味で翻訳不可能であるわけで、如何せん彼女にお見せすることなど叶わない。不義理は不義理。だが、それもお許しいただけるだろう。唯しみじみと懐かしく、「同志愛」といった絆を新たにしている。

最後に一言。実はそれもかなり昔なのだが、そもそもこのMrs. マーガレット・ラスティンの論文は、飛谷渉先生がくおもしろかったですよ>とおっしゃって、わざわざ私に送ってくださったものなのだ。それで翻訳を是非にということではなかったわけだが・・。ところが近頃頼に、児童養護施設という現場での心理臨床が取り沙汰されているのを耳にする。そうしたジャンルの出版物も大いに活況を呈している。そこで、微力ながら私からもエールをお届けできたらと思い、翻訳を試みた次第である。ここからさらに、心ある心理臨床家の皆さま方に何かしら繋がってゆくことを祈願している。(2020/07/05 記)

【参考図書一覧】

・ラステイン,M / カグリアータ,E.編 「**子どものこころのアセスメント—乳幼児から思春期の精神分析アプローチ**」(木部則雄監訳 岩崎学術出版社 2007)

・ラステイン,M / ロード,M./ダビンスキー,H./ダビンスキー,A.編 「**発達障害・被虐待児のこころの世界—精神分析による包括的理解**」(木部則雄監訳 岩崎学術出版社 2017)

・メアリー・ポストン&ロレーヌ・スザー編著 「**被虐待児の精神分析的な心理療法**」(平井正三、鶴飼奈津子、西村富士子監訳 金剛出版 2006)

・平井正三・西村理晃編 認定 NPO 法人 子どもの心理療法支援会(サポチル)著 「**児童養護施設の子どもへの精神分析的な心理療法**」(誠心書房 2018)

・内海新祐著 「**児童養護施設の心理臨床—‘虐待’のその後を生きる**」(日本評論社 2013)

・リサ・ミラー、マーガレット・ラステイン、マイケル・ラステイン、ジュディ・シャトルワース編 「**乳幼児観察入門—早期母子関係の世界**」(木部則雄、鈴木龍、脇谷順子監訳 創元社 2019)

・マーサ・ハリス著 「**児童分析家の語る 子どものこころの育ち**」(山上千鶴子訳 岩崎学術出版社 2016)

・鈴木龍・上田順一:編 「子育て、保育、こころのケアにいきる **赤ちゃん観察**」(金剛出版 2019)

・山上雅子著 「**子どもが育つということ—身体と関係性の発達臨床**」(ミネルヴァ書房 2018)
